Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介致します

合田 直弘

暮れも押し詰まった12月29日、英国中東部のサウスウェル競馬場で行われた開催の第1競走に組まれた、オールウェザー2マイル（約3，219m）のハンデ戦を制したラエストレラが、今回のこのコラムの主役である。

レース施行時で12歳、3日経って年が明けたら13歳になったのがラエストレラで、その年齢の馬が平地で勝ち星を挙げただけでも話題になってよいのだが、更に凄いのは、それが同馬にとってオールウェザートラックで挙げた27個目の勝ち星だった点にある。ゴールの瞬間、ラエストレラはオールウェザー歴代最多勝記録を樹立したのだった。

00年のG1英千ギニー（芝8F）2着馬プリンセスエレンの初仔として、03年3月13日に北米で生まれたラエストレラ。北米で言えば、ケンタッキーダービーを制した後にプリークネスSで故障し命を落としたバーバロらと。欧州ならば、これも悲劇の名馬として記憶されているジョージワシントン。日本ならばメイショウサムソン、アドマイヤムーンらと同世代となる。父は芝チャンピオンのシアトリカルという血統背景が考慮されたのか、当時の馬主が同馬の拠点に選んだのは英国で、英オークス3着馬サミットヴィルらを手掛けたジェームス・ギヴン厩舎から3歳4月にデビュー。4歳10月までに芝で13戦1勝、オールウェザーで5戦2勝の成績を挙げた後、タタソールズの現役馬セールに上場され、所有者が代わってドン・キャンティロン厩舎に転厩。新たな馬主の意向で障害に転身し7戦1勝の成績を挙げた後、再び平地に戻った5歳11月以降、ラエストレラはほぼオールウェザートラックを専門に走るようになった。

6歳の3月に両前脚骨折という重症を負い、当時の馬主は同馬を手放すことを決意。それなら自分の所有馬として走らせたいと、治療を施した上での現役続行を決めたのが管理調教師のドン・キャンティロンだった。調教師の我慢と執念は実を結び、ほぼ2年にわたった休養からカムバックした8歳春、サウスウェルのオールウェザーを舞台とした条件戦を6戦して6連勝をマーク。キャンティロン師の期待に応えることになった。

あまりにも調子が良かったため、ロイヤルアスコットのハンデ戦アスコットS（芝20F）を使ったのを皮切りに、芝を4戦して未勝利に終わると、再びオールウェザーに戻り、8歳秋に2勝、9歳時に5勝、10歳時に2勝、11歳時3勝をマーク。12歳となった昨年1月にリングフィールドで行われたハンデ戦（AW16F）で勝利を収めた段階で、オールウェザートラックにおける同馬の勝ち星が26に到達。スタンドガードが08年から14年にかけて作った数字に並ぶ、最多勝タイ記録をマークすることになった。

ところが、同馬はその後4連敗。ラエストレラがオールウェザートラックでここまで負け続けたことはかつてなく、常日頃から「新記録にはこだわらない」と公言していたキャンティロン師が、ここで負けたら引退の覚悟で臨んだのが、12月29日の一戦だった。

13年12月から同馬の主戦を務めていたグラハム・リーが、この日はクリスマス休暇中で、代わって手綱をとったのはトム・クイーリーだった。彼のラエストレラへの騎乗はこれが8度目だったが、前回騎乗したのは07年の10月で、彼にとっては実に8年2か月振りの再騎乗だったあたりにも、ラエストレラがいかに長く現役を続けてきたかが窺い知れる。

剛腕クイーリーに導かれ、後方から渋太く末脚を伸ばして、ラエストレラは新記録となる27個目の勝ち星を手中にした。

ダートへの回帰が主流となった北米と異なり、オールウェザーにおける競馬がすっかり定着したのが欧州である。今季の英国を例にとれば、年間で平地開催が888日組まれているうち、実に35．5％をしめる315開催がオールウェザーを舞台とした競馬なのだ。今後もラエストレラのような、オールウェザーを主戦場としたスターホースが生まれる可能性は、おおいにありそうである。